

# 山間地域における葬儀の変化が地域社会にもたらす影響に関する一考察 ～飛騨地域における事例から～

## A Study on the Change of Funeral Service Facilities and Community Decline in the Mountain Area

—Based on a Case Study on the Hida Area, Gifu Prefecture—

大井 智香子  
Chikako OOI

日本の村落共同体のなかで重要な位置を占めてきたもののひとつに葬儀がある。近隣住民の手によって営まれてきた葬儀は、人びとが人間関係を紡ぎ、知識と技術を伝承し、それぞれの持つ力を発揮しつつ共同で組織的活動を行なう場でもあった。葬儀は、共同体を維持する上で必要な「つながり」を構築し、あるいは強化、再確認をする“場”でもあったといえる。日本の各地では、近隣と親類が力を合わせて行なう葬儀が近年まで行われてきたが、岐阜県飛騨地域においては急速に葬儀の形態が変化しており、それに伴い葬儀を通して培っていた近隣、親類間のつながりが希薄化し、伝統的な技術や知識を伝承する場も失われつつある。このことは、災害等の非常事態の際に生活を防衛する力の減退にもつながる。また、現代に生きる人間同士の「つながり」の希薄化のみでなく、先代から子孫に続く「つながり」に対する不安も明らかとなった。

共同体のなかでの共同作業を以前のかたちに戻すことは不可能であろうし、地域社会の課題解決にとって本質的なことではない。葬儀をはじめとする共同作業がかたちを変え、あるいは消失することに伴って失われる多くのことを認識し、「つながり」の維持・再構築のために可能な方策を模索することが重要である。

キーワード：山間地域、地域社会、つながり、共同体、葬儀

### はじめに

自然環境が厳しい山間地域において、人びとは生きるために村落共同体に所属し、生き抜くための環境は村落共同体によって創り出され、維持されていた。

生活様式が都市化し物質的・経済的に豊かになるとともに、生活に必要なあらゆるものをサービスとして購入することができるようになった。同時に、共同体における共同作業の必要が減少した。このことは人びとのつきあい方に変化を及ぼし、次第に「つながり」が希薄化した。生活様式が大きく変化したとはいえ、岐阜県飛騨地域においては、近隣相互のつながり、関わり合いが、かつてほど濃密ではないながら現在も受け継がれている。

日本の村落共同体のなかで重要な位置を占めてきたもののひとつに葬儀がある。その人に関わりのあった人たちが、その最期を共同で送る場であった葬儀は、人びとが人間関係を紡ぎ、知識と技術を伝承し、それぞれの持つ力を発揮しつつ共同で組織的活動を行なう場でもあった。葬儀は、共同体を維持する上で必要な「つながり」を構築し、あるいは強化、再確認をする場でもあった。

その場がいま、急速に失われつつある。都市部においては近隣あがりの葬儀は昭和40～50年代にかけて減少したが、日本の各地には、近隣と親類が力を合わせて行なう葬儀が近年まで行われている。岐阜県飛騨地域もそ

のひとつであった。しかし、飛騨地域においては、この3～5年くらいの間に急速に葬儀の形態が変化している(2011年12月現在)。この変化は、地域社会でのつながりを急速に失わせつつある。

本稿の目的は、かつて飛騨地域で執り行われてきた葬儀の場で近隣住民と親類が担っていた役割を整理し、この関係や場が失われることの意味について考察することである。

葬祭の社会的機能としては、(1) 死の社会的承認と関係・秩序の回復、(2) 社会関係の再確認と協力の機会、(3) 癒しのはたらき等が指摘されている<sup>1</sup>。本稿は、このなかの(2)の機能に着目する。なかでも、葬儀という場を通して構築される人間関係(つながりあい)、共同作業を通して伝承される知識・技術に焦点をあてる。

なお、「葬祭」とは、葬儀(死者を弔うこと)と祭祀(死者を祭ること)を指す。本稿は、このうちの「葬儀」(死者を葬るための儀式)に着目する。

本稿においては、葬儀専用の式場、自前のホールを所有し、葬儀の貸出、諸手続きの代行、物品の準備など、葬儀に関わる全てを取りそろえて提供するトータルサービスを「葬儀場」と呼ぶ。これに対して、「葬祭業者」とは、自宅や寺、公民館等の葬儀場所に葬具など葬儀に必要な物品を届け、設置する業者を指すこととする。

## 1. 村落共同体における「つながり」

### (1) 共同作業の減少に伴う「つながり」の希薄化

近年、人間関係の希薄化が社会問題として取り上げられている。「無縁社会」<sup>2</sup>という言葉に象徴されるように、あらゆるつながりを失った人たちが増加し、生きることに対する不安が高まっている。孤立化、無縁化を防ぐための対策も講じられはじめている。2000（平成12）年「社会的な援護を要する人びとに対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書<sup>3</sup>では、社会福祉法の成立（社会事業法の改正）を、地域社会における「つながり」を再構築するための改正であるともいえる、としている。

元来、人間は「つながり」なしに生きることは困難であったはずだ。先人たちは、生き抜くために共同体を形成し、そのなかで生きてきた。生産（農業、漁業、林業）、土木事業、環境整備、屋根葺（屋根頼母子、屋根講）、葬式のための共同作業、共有財産の管理（入会山）、信仰のための祭礼行事など<sup>4</sup>、生きるために必要な環境は、共同体によって創り出され、維持されていた。

生きるためには共同体の維持が不可欠であり、自分自身がその共同体の構成員として認められることが重要であった。村落共同体においてその構成員であるということは、「あるべき」ルールに従うという強制力を伴うものであった。それは気づまりな関係であったかもしれないが、窮屈さ以上に、誰も頼る相手がないという状況に陥ることへの不安が大きかったことであろう。共同体に所属することで得られるものは、労働力や物品の貸し借りというモノの共有のみでなく、それらを「貸し借りすることができる」、また「共同作業に参加することができる」関係の相手がいるという安心感である。

都市化に伴い、あらゆるものが貨幣で購入可能となった。人間関係による相互貸与ではなく、必要に応じて物資やサービスを購入することになる。経済力をつけた人から、生活に必要な物資を個人で購入するようになり、共同所有・管理するモノが減少した。生活のなかで共同作業が必要なくなったことに伴い地域社会のなかで人々のつながりが希薄化していった。

### (2) 村落共同体における葬儀の意味

共同作業の中で、葬式は重要な位置を占めた。その理由を、「旅の巨人」といわれた民俗学者の宮本常一は次のように記している。「もともと人間生活の中で一番大切なことは、寂しい思いで死ぬことのないようにすることであった。またそれが生きていく人びとの最後の願いでもあったのである。人びとは死ぬ時の孤独感に耐えられなかった。」<sup>5</sup>

葬儀の習慣とその変遷について寺院関係者ならびに住民からの聞き取りの際、ほとんど必ずといってよいほど「ムラハチブを知っているか」という話から始まった。ムラハチブ、あるいはハチブとは村八分と書き、共同体の決めごとに反する行為があった場合などに制裁として

付き合いを断つ習慣である。しかし、すべてのつきあいを断ったわけではなく、通常につきあいを十分とすると、八分は断つが非常時である二分は関わりを持った。その二分とは、火事と葬式である。木と紙で作られている日本家屋にとって火事は命と全財産に関わる脅威であり、類焼は共同体全体の危機であった。そして、人の死は通常につきあいを越えた大事であった。

その人がいかに貧しくても、村に住んでいれば、その人のためにふさわしい葬式をするだけの組織はできていて、貧しいから葬式ができないということはなかった。葬式に要する食糧は人びとが持って集まり、その費用は香奠として持って行った<sup>6</sup>。

高山市国府町宇津江地区では、組内の手伝い（3-1）で詳述）には、手伝い1日は1升、2日は2升と草物を持って行く申し合わせになっていた<sup>7</sup>。米だけで炊いた飯をほとんど食べられない生活を送っていた時代、せめて一生の終わりの葬式は米の飯で送りたいとの思いが込められていたのだろう。葬式のことを「今日は米の飯や」と言った。草物とは野菜や乾燥させた山菜などを指す。このほかに、じゃがいもや里芋などは藁苞にして持参した。

誰もが必ずいつかは迎える死というものを、人びとはこのようにして共同で見送ってきた。

村八分は、村落共同体において最もつらい制裁であったはずであるが、現代にふりかえてみるときに、山間地の文化が持っていたゆとり、優しさを感じることができるといえる。日頃につきあいを断つても村十分にはしなかった。2000（平成12）年に厚生省 社会・援護局「社会的な援護を要する人びとに対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書<sup>8</sup>において「現代社会の社会福祉の諸問題」として指摘された「社会的排除」などは、いうなれば村十分である。

火事は村落共同体の危機でもあるが、葬儀は放つておいても自らの生活には大事ない。それを見過ごさず、弔いごとには力を貸した。他所へ放浪でもしない限り、つまり共同体の区域内で生活している限り、現代でいう“無縁死”のない社会であったともいえる。

## 2. 葬儀の変化

時代とともに葬儀のあり方、社会における位置づけは変化してきた。ひとことに葬儀といっても、宗教宗派により、また地域ごとに、その持つ意味やあり方は多様である。まとめることは難しいが、本章では、各集落ごとに執り行われてきた葬儀が、葬儀場中心の葬儀へと変化した背景について整理する。

### (1) 現代の葬儀の場所

現代の葬儀は、その大半が自宅以外の場所で挙げられている。日本消費者協会の調査<sup>9</sup>によれば、2010（平

成 22) 年 3 月～6 月の時点で、回答者の 74.8% が葬儀の場所を「葬儀専用の式場」と回答しており圧倒的多数を占める。次に「寺・教会」が 9.5%、「自宅」が 8.8%、「町内会・自治会などの集会所」が 2.7% となっており、「葬儀専用の式場」以外は、いずれも 1 割を下回る。

1995 (平成 7 年) 年の調査<sup>10</sup>では、「自宅」45.2% で最も多い。次いで「寺・神社・教会」が 24.4%、「葬儀専門の式場」が 17.4%、「自治会などの集会所」が 7.4% であった。

岐阜を含む「中部 B」の区分に注目すると、1995 年の時点では全体の 5 割弱 (48.1%) の葬儀が自宅で行われており、次いで寺・教会が約 4 割 (39.3%) であった。2010 年時点では 9 割強が「葬儀専用の式場」で行われるようになっている。この 15 年間に、葬儀の場所は大きく変化したことがわかる。

表 1 葬儀場所の変化 (%)

	1995年		2010年	
	全体	中部B	全体	中部B
自宅	45.2	48.1	8.8	0
葬儀専用の式場 (葬祭センター・式場)	17.4	13.0	74.8	90.9
寺・教会	24.4	39.3	9.5	0
町内会・自治会などの集会所	7.2	2.8	2.7	0
ホテル	設問なし	設問なし	0.7	0
その他	1.1	0	2.7	9.1
無回答・不明	4.6	1.9	0.7	0

※ 日本消費者協会「葬儀についてのアンケート調査」第 5 回 (1995) と第 9 回 (2010) をもとに筆者作成。項目は第 9 回調査に基づく。

この調査結果からも、現代の葬儀はそのほとんどが葬儀専用の式場において執り行われていることがわかる。このことに伴い、葬儀のほぼ全てが葬儀場を運営する業者とそのスタッフによって担われるようになった。かつては葬儀に関する知識・技術・資材は共同体のなかで受け継がれていたが、その分断が急速に進んでいる。現代日本の葬儀に関して詳細な調査研究を行なっている山田慎也<sup>11</sup>は、現代の葬祭業者の役割を、(1) 葬儀に必要な葬具一式、事務用品、返礼品などの物品の準備、(2) 僧侶等の日程調整、死亡届提出代行、火葬場の予約、通夜・葬儀の司会などのサービス提供、(3) 葬儀全般に関する知識の提供、としている。従来「多くの研究において伝統的習俗の破壊者として等閑視されてきた」<sup>12</sup> 葬祭業者であるが、葬儀に関する知識の提供も含めて現代は葬祭業者なしでは葬儀を営むことは不可能であろう。

葬儀はいつ頃からどのような理由で、その形を変えてきたのだろうか。

## (2) 葬儀の変遷とその背景

各集落ごとに執り行われていた葬儀が大きくその形をかえるきっかけとなった出来事は、主に次の 5 点であると考えられる。(1) 1884 (明治 17) 年の「墓地及埋葬取締規則」制定、(2) 戦後の新生活運動<sup>13</sup>による冠婚葬祭の簡素化や封建的因習の打破への取り組み、(3) 各地で都市型の生活への変化、(4) 公立の火葬場の建設が進んだこと、(5) 自宅で最期を迎える人の減少、である。

1884 (明治 17) 年に制定された「墓地及埋葬取締規則」によって市街地での埋葬や火葬が禁じられ、都市部での葬列は次第に減少した<sup>14</sup>。しかし、山間地等においては近年まで葬列も行なわれていた。

1950 年代、新生活運動の影響により、葬儀のしつらえや香典袋の簡略化や返礼なしの葬儀が行われるようになった。その後、高度経済成長とともに祭壇をはじめとする葬儀のしつらえは大型で豪華なものへと変化していくが、葬列や会食など近隣住民や会葬者の関わり方はその後も簡略化されていくこととなった。

都市型の生活は自宅での葬儀を困難なものとした。襖を明け放せば大きな部屋として利用することのできる日本家屋と異なり、廊下とドアで部屋が結ばれた家屋では大人数の出入りがある葬儀には不向きである。核家族化により世帯の規模が縮小し、居住場所を移動する人が増加したことにより親類が必ずしも近くにいるとは限らなくなった。近隣住民との関係も希薄化し、葬儀の準備や葬具づくりを親族や近隣住民の手によって行なうことが困難になった。次第に、祭壇等や棺など葬儀に必要な葬具を整える葬儀業者が増えていった。

1960 年代頃より、各地で公営の火葬場建設が進んだ。飛騨地域でも 1960～1970 年代に公営の火葬場が相次いで建設され、土葬や集落ごとの火葬場 (ヤキバ) は次第に姿を消した。ヤキバの多くは村居から離れた山裾や山かげなどに設けられていた<sup>15</sup>。また、近年まで土葬を行っていた地区もある。土葬の場合、一人に一つの墓となるため火葬の場合より広い土地が必要となる。墓穴を掘るにも人手が必要になるなどの理由から次第に土葬の風習は廃れていった。

公営の火葬場はかつてのヤキバと異なり集落近くにあるとは限らない。多くの集落からは、人力の搬送が困難な距離にある。自宅で葬儀を出して人力で搬送するより、寺や集会場など一定の広さのある場所で葬儀を執り行い霊柩車で搬送が増加する。寺院は従来仏事などで大勢の人が集い料理をしていたため広い庫裡 (台所) があり、数多くの什器を保有しているなど、葬儀をあげるための環境は整っていた。自宅で葬儀をあげていた頃から、葬具を寺で保管していた例もある。

地区ごとの差異、特色はあるものの、飛騨地域全体で見ると、昭和 30 年代頃から寺での葬儀が急増した。もともと環境が整っていたとはいえ、台所や厠など水回り

の改修、葬儀終了後のお斎（おとき）など会食が可能な広間を整えるなど施設整備を行なった寺も多い。

寺や公民館での葬儀の増加に伴い、葬具や棺を提供する業者の出現など、葬儀に関する業務の分業化が進んだ。映画「おくりびと」<sup>16</sup>の主人公の職業、納棺師もそのひとつである。やがて葬儀に関する一切を取り仕切る葬儀請負ともいえる発展を遂げ、“葬祭業”というサービス業の一分野を形成するまでとなる。

この普及にも地域差がある。近隣のつながりの強い地域では、祭壇の設置や納棺、式場の装飾は業者に依頼するが、受付や知らせ配り（葬儀の案内）、煮炊きなどは、依然として近隣住民の手によって行われてきた。その場合でも、自宅での葬儀と比較して、一定の広さのある寺院や集会所での葬儀は従来の負担が軽減されるものであった。

1974（昭和49）年、自宅での死亡が死亡者全体の5割を切った<sup>17</sup>。そして次第に、医療機関で最期を迎える人が増えていった。2010（平成22）年は、全体の85.1%が医療機関ないし高齢者施設で死亡している<sup>18</sup>。かつて自宅で死を迎えることが当たり前だった時代は、そのまま自宅で葬儀を執り行うことに支障がなかった。医療機関での死亡が主となった現在では葬儀場まで故人を搬送しなくてはならない。遺体となった故人を一旦自宅に迎えてきたが、近年では集合住宅や高層階であるなど自宅に運び込むことが困難と考える人が増え、葬儀の場所に直接移動することも増えている。

やがて次第に、会場や駐車場を手配する必要のない自前のホールを所有し、葬儀の貸出、諸手続きの代行、物品の準備など、葬儀に関わる全てを取りそろえて提供するトータルサービス業としての葬儀場が登場した。それに伴い、組の手伝う諸雑事が減り、手伝っても食事の準備が主になった。さらに逆に、近隣が葬家から接待される機会に変化することになった<sup>19</sup>。

従来の葬儀の方法を話していた場で「福祉施設で長く暮らして、病院で長く寝付いて、葬式が葬儀場となったから、骨になる前（人間の姿である間 ※筆者注）にわざわざ霊柩車で自宅の前を通るようになったンやな。昔は家から出たもんやに」という声を繰り返した。

死亡場所が自宅から病院に移り、葬儀場がサービス業としての性格を濃くしていくことに伴い、葬儀は自宅や近隣関係とは切り離された行事として定着していった。

### 3. 飛騨地域における葬儀の変化

正確な数値を把握することはできないが、聞きとり調査<sup>20</sup>によれば「（2010～2011年の時点で）急激な変化はここ3年ほど」との声が圧倒的に多く、2008年以降の変化が大きいことが推察できる。その変化とは、葬儀を挙げる場所が、自宅や公民館、お寺などから葬祭場へ変わったこと、それに伴い近隣や親類の人たちの関わり

方が変化していることを指す。ある寺の過去帳からは、2008（平成20）年から葬儀の場が葬儀場へと移行していることがわかった。

本章では、飛騨地域における従来の葬儀の概要を紹介し、地域社会のなかで葬儀が持っていた機能について整理を試みる。

#### (1) 飛騨地域の葬儀

飛騨地域とは、岐阜県の行政区域5圏域のひとつで、県内の北部、高山市、飛騨市、下呂市、大野郡白川村<sup>21</sup>を含む区域である。3市はいずれも平成の合併により誕生した広域の自治体であり、飛騨地域が岐阜県全体の面積に占める割合は39.3%<sup>22</sup>である。飛騨地域全体のうち森林面積は386,950ha、森林率92.6%であり可住面積は限られている。平地は少なく、高山市街地を除き、多くの集落は急峻な山あいを縫うように流れる河川沿いに点在している。冬は寒さが厳しく、白川村、高山市高根町などでは積雪量が2mを超え、高山市荘川町では零下20℃を下回る。飛騨地域の人口は159,549人で県全体に占める人口の割合は7.67%<sup>23</sup>、過疎化が進んでいる。

飛騨地域は、真宗王国と呼ばれることもあるほど浄土真宗門徒の割合が多い。浄土宗、禅宗ほか各宗派の寺院も数多く、ほとんど全ての家がいずれかの寺院と寺檀関係を結んでいる。葬儀は基本的には各家の檀那寺の宗派の方法に沿って執り行われるが、地域社会においては宗教行事というより習俗としての意味合いが強い。同じ檀那寺に属する檀家であっても集落ごとに細かな相違がある。

葬儀には、檀那寺の住職を導師として招くが、そのほかに複数の客僧も招く。高山市街地では、通常3～4人程度で、大規模な葬儀になると7～8人の客僧が揃う。招く客僧は宗派に関係なく普段からつき合いのある寺院の僧侶が招かれる。ちなみに、高山市街地においてはお盆のお参りも、檀那寺の住職のほかに、その家と普段からつき合いのある寺院の僧侶が仏壇前にお参りに訪れる。3～4人程度が一般的だという。葬儀の際は、檀那寺の宗派のお経を唱和することになるが、お盆のお参りは訪れた僧侶自身それぞれの宗派のお経をあげる。高山市街地の人びとの宗教観をよく現している風習といえるだろう。

自宅で葬儀を出す場合、その準備と運営のほぼすべてを近隣（組）が担った。親類も関わるが、それは親族代表が葬儀の手順などについて承認に関わる程度である。葬儀の最中、故人の家族は葬儀運営には一切かかわることなく、弔いに専念する。ここでは、近隣住民と親類の関わりを中心に、飛騨地域における一般的な葬儀の流れを紹介する。

**葬儀の連絡** 誰かが亡くなると、近親者と近隣（組、班など）に連絡をする。組が中心となって葬儀を準備していたころには、親戚よりも速やかに隣近所に知らせる

ことが重要だった<sup>24</sup>。近隣の人びとは弔問に訪れるとともに、組長は葬儀の諸事について葬家の意向を伺う。組の人たちは葬儀委員長（組長であることが多い）の指示に従い手分けして行動することになるが、調理を始めとして埋葬に至る一切を担当することになるので、最低2日間は仕事を休む必要があった<sup>25</sup>。

その晩には、枕経（枕勤め）の為に檀那寺の僧侶が呼ばれる。地域により、葬儀の日取りが決まってから檀那寺に依頼するところ<sup>26</sup>と僧侶を交えて葬儀の日程を決めるところ<sup>27</sup>があり、これ以外にも細かな習慣は集落ごとに多種多様である。

例えば、高山市国府町宇津江地区には「葬式組」という葬式だけの組があり、二人手伝う家は白米2升、一人手伝う家は白米1升を持ち、草物をそえて持ち寄り、葬式の一切を組の者で勤めた<sup>28</sup>。「葬式組」は、身内の死によって悲しみにくれる家族への配慮からできた互助組織であるといえ、近隣が中心となって葬儀の一切を執り行う習慣は、同様の考えに依るものであろう。

**葬儀の準備** 組内の成人をあげて葬儀の準備を行なった。自宅での葬儀の場合は、掃除、障子の貼り替え、座敷には畳を、板の間には筵を敷いた。香典返しや料理、ウドンブルマイ（葬儀の最後に提供する食事、ヒキハライ）、炊く飯の量なども葬儀委員長を中心に組で決めた。葬儀の主な役割は次のとおりである。

表2 組内の葬儀の役割例：宮村（現：高山市一之宮町）の例

ツケトドケ	寺に出す葬式の知らせの手紙（ツケ）を届ける。
帳方	葬儀に係る費用全般の出納管理
役場届出	死亡届、火葬場の予約など
お寺届出	檀那寺に連絡をする。また檀那寺の僧侶をはじめ読経の僧を手配する。
組内連絡係	組内に連絡を行なう。
マチヤワイ	荷車で高山の町に買い物に行く。シカバナ（四華花）や棺台に貼る紙は棺屋で購入してきた。
焼き場ヤワイ	集落内にヤキバがあった頃は前日から準備を行なった。
進行係	焼香順の決定
料理方	料理の指図を行なう。組内で経験のある女房がつく。
茶方	湯茶をわかす。
汁方	汁もの、惣菜をつくる。
飯炊き	飯を炊く。
酒わかし	酒をわかす。
会計役	香典をつける。

※『宮村史 通史編二』（2004）<sup>29</sup>

P.738-739 をもとに筆者作成

現在では、写真係、弔電係、駐車場案内係なども組内で決める。なお、「ヤワイ」とは飛驒のことばで「準備する、調える」という意味である。調理の係が上記の表ほど係にわかれていない場合もある。また、調理担当が配膳まで行う場合もある。

葬儀を家で出すといっても、いわゆる式場だけで家中を使うことになり、多くの場合一方の隣は組の人の宿と炊事場に、もう一方の隣は法中（僧侶）の宿になった<sup>30</sup>。棺を大工に依頼することもあったが、組やムラの者がつくこともあった。焼き場ヤワイは野ごしらえとも言い、火葬の準備を行なった。地域によっては葬儀の準備そのものをノゴシラエと呼ぶところもある<sup>31</sup>。棺や棺飾りづくり、焼き場ヤワイ、墓穴掘りなどは男衆の重要な仕事であった。

土葬の穴掘り（野堀役）は葬儀の準備で一番重要であったという<sup>32</sup>。ことに大雪の季節の穴掘りは大変な仕事であった。組内から選ばれ、葬式の午前中に穴を掘り、午後に葬式というのが一般的であった。穴掘りの作業中には、喪主の家から冷酒1升と天ぶら、豆腐、竹の子などの入った重箱を持って慰労に行った。

お茶煮、飯炊き、汁の責任者は組の女衆から決め、その人を中心に組の人が手伝いに来た<sup>33</sup>。

**湯灌、納棺** 納棺前に、近隣者によって湯灌をする。湯灌とは、死者を湯で洗い清めることである。通常は子どもなど近しい血縁者が行った。湯灌が済むと、死装束などが死者の身につけられ、棺に納められた。現在は、ネカン（寝棺）が主流であるが昔はほとんどがタテカン（坐棺）であった。息をひきとると直ぐに納棺しやすい姿勢に整えた。

保冷剤が普及する以前には、夏に死者が出ると遺体が腐敗しやすいので、すぐに仮葬をして遺体を処理し、髪の毛などを切っておき、後から正式な葬儀を行なう場合もあった<sup>34</sup>。

**通夜（伽、夜伽）** 夜7時頃から僧侶に御経をあげてもらい、家族や親戚、両隣がお参りし、後、近親者が香やローソクの火を絶やす事がないよう一夜をお守りした。また、酒を出し死者の生前を語り合ったりした<sup>35</sup>。宮村では、通夜の時は普通の着物で出席した<sup>36</sup>。荘川では、通夜には僧侶の読経はなく、組内の男女が集まっておそくまで夜伽しながら、一同揃って勤行した<sup>37</sup>。

**葬儀** 僧侶の読経により始まる。喪主は、黒紋付羽織袴、女性は喪服を着用し葬式髻（たぶさ）という髪を結う習慣があった<sup>38</sup>。喪主より順次焼香し、狭い時は坐ったままで焼香台を廻した<sup>39</sup>。また、会葬者が屋内に入りきれず、屋外で会葬することもあった<sup>40</sup>。

**葬列、野送り** 葬式が終わると、配役（あるいは役定め）に従って葬列を組み埋葬場所あるいは火葬場へ向かう。野送りの「野（ノ）」には火葬場という意味も込められている。葬列、または野送りの方法もまた、地域や宗派ごとにさまざまである。家の経済状態によって飾り

に違いがあり、従って配役も異なる。ここでは宮村の葬列の例を紹介する<sup>41</sup>。

四華花(シカバナ)：親戚2人、鶴(燭台)：親戚2人、  
 香炉：親戚2人、華束(ケソク)：隣2人、  
 万十盛(マンジュウモリ)：組2人、  
 麩盛(フモリ)：組2人、籠盛(カゴモリ)：組2人、  
 灯籠(棺前2、棺後2)：親戚4人、  
 肩添(カタゾエ) 棺を担ぐ：近親者4人、  
 棺前：二男、娘、孫、棺後：喪主(長男)

現在では、野辺送りはほとんどみられなくなったが、火葬場への移動が霊柩車であっても、四華花、鶴、華束ほかの配役が定められ、車に分乗して移動する姿が見られる。2008(平成20)年の時点で、飛騨市神岡町の谷・中山地区では葬儀行列が組まれているという記述がある<sup>42</sup>。死者の出た家から東林寺まで行列が組まれ、寺で告別式が行われているという。

**お斎(オトキ)** 一般会葬者は、葬列を見送った後にお斎(オトキ)についた。お斎とは、会葬者に振舞われる酒食のことである。お斎も、組の人たちによって調理された。その場では、親戚代表がお礼を述べる。

**火葬、埋葬、野勤め** 火葬は真宗の門徒によって行われ、土葬は禅宗の檀家で行なわれてきた。しかし、都市化するにしたがって火葬地帯が多くなり、設備のよい火葬場ができるようになり、葬儀の形態が変わり、昭和10年頃までの面影はなくなった<sup>43</sup>。土葬が一般的であった集落では、変死や伝染病などによる死者があったときのみ火葬とした<sup>44</sup>。これは、火葬には長時間を要したためと考えられる。

僧侶による読経と焼香の後、四華花(シカバナ)に点火し、棺に火をつけた。火葬場が整備される以前、ヤキバでの火葬の場合は、棺を多量の稲藁で包み、縄で縛って固定してから火を点け、一気に燃え上がるのを防ぐため、また火が満遍なく廻るように濡れ簀をかけて調整した<sup>45 46</sup>。

藁の起き方、縄のかけ方によっては、遺体の頭や手足が伸び出て焼け残ることがあるため、長年の経験が必要であった。火葬に要する時間は、野天の場合は8時間以上かかり、時には翌朝までかかることもあった<sup>47</sup>。

**ヒキハライ、ウドンブルマイ** ヤキバには組の衆3人程が残って、他の人は引き揚げる。家でお斎(オトキ)が済むと、最後に組の人たちに対して骨折り振舞が行われる<sup>48</sup>。高山市付近ではヒキハライといって、酒とうどんを出して近親や縁者が接待する<sup>49</sup>。ウドンブルマイとも呼ばれる。ここで提供されるうどんは、ゆで上げたうどんをお湯に泳がせつゆにつけて食べるいわゆる釜あげうどん、地元では「湯づき」と呼ばれている。故人の家族の片づけの負担を少しでも軽減しようとする配慮からこの湯づきが習慣化したものではないだろうか。

**骨拾い、お寺参り** あくる日、近親の人たちがヤキバ

に行き、骨を拾い、骨壺に納めて帰る。仏壇にお骨を納めて僧侶による読経が行われた。宇津江では家族親族の男衆がお骨を持ち、白米2升・お布施等を揃えて寺に出向き御経をあげてもらいお礼を言った<sup>50</sup>。飛騨市古川町では、お寺にお礼参りに出かけた<sup>51</sup>。上宝では、この後に組の人の労を犒うためうどんや酒が振舞われる<sup>52</sup>。初七日の法事をお骨拾いの後の読経と同日に行なう集落も多い。

以前は死亡した日から7日おきに法要を欠かさず行っていた。35日あるいは49日の法事の日を忌明(イミアキ)とし、親戚を始め葬儀でお世話になった人びとが呼ばれ、会食をした。

## (2) 従来の葬儀がもっていた意味

こうして改めて整理してみると、葬儀の持つ意味が現代とは大きく異なることに気づく。葬儀といえば、現代では通夜と告別式、初七日法要までを指す。これらは、従来の葬儀のなかでは行なうべき行事の一部である。地域社会で執り行われてきた葬儀は、その人が亡くなった瞬間から先祖の仲間入りをして祀られる存在となるまで、家族、親族、近隣を挙げて送る一連の行為であった。その過程においては、家族などのつながりの濃い親族は故人との別れに専念し、家族の食事を始めとする葬儀に関わる諸事全般は近隣が総力を挙げて担っていた。

そのしくみは非常に効率的に整えられている。葬儀委員長をはじめとする年長者が組内の者の得手不得手をよく心得ており、適材適所の配置を行なった。これらの共同作業を通して、人びとは知識と技術を伝承していった。葬儀の手順、組内の共有資材の保管場所、使用方法、買出しの工夫、料理の味付けや盛り付け、葬儀の際の礼儀作法などの地域や技術のほかに、長時間をともに過ごすなかで組内の者同士が相互に深く知りあい、縁を結ぶ場でもあった。

飛騨地域では「葬式を3回経験すると土地の者になる」と言う。この意味はいろいろに解釈されている<sup>53</sup>が、そのひとつに「他所から移入したものであっても、葬儀という共同作業を通してその人となりを知ってもらうことができ、地元のルールを学ぶことができる」という意味がある。葬儀の手伝いの過程で「お前、〇〇に来た嫁さんやもんナ」と声をかけられ、近隣の人たちに存在を認められ受け入れられるきっかけとなった。また手伝いの時間は「最近〇〇のばあさんを見かけんが、どうしたんや」など安否確認、情報交換の場でもあった。

その葬儀が、近年急速に変化しつつある。2章で述べた大きな流れのなかで葬儀は次第にあり方を変化させてきた。土葬が姿を消し、ヤキバではなく火葬場での火葬するようになってから、多くの地域で野勤めは見られなくなった。また、お斎の料理を全て手作りするのではなく一部を総菜屋で購入する、食事は仕出し屋から取る、などのように形を変えている。しかし、それはあくまで

「形を変えている」だけで、従来どおり組を中心に葬儀を切り盛りする習慣は年長者を中心に受け継がれてきた。火葬場が遠くなったことにより葬列は霊柩車で移動に変わり、会社勤めの人が増え葬儀のために2～3日も仕事を休むことが難しくなったため、葬儀の準備の一部あるいは大部分を外注するようになったが、葬儀を取り仕切るのは近隣住民の役割であった。

2004（平成16）年の災害復旧活動の聞きとり調査<sup>54</sup>において、近隣住民相互で声をかけあい指定避難所は危険だからと独自判断で高台に避難して人的被害を出さなかった集落や、発災後ただちに住民自らが家屋内外の復旧活動や炊き出しを行なっている集落に数多く出合った。これらの集落は、いずれも近隣住民らの手による葬儀を行なっている地区であった。これが、筆者が地域社会における葬儀の意味について深く感心をよせるきっかけとなった。

葬儀は、一人の死を見送る儀礼であるが、地域社会のなかでは、共同体の知識と技術を伝承し、人的な結びつきを強くする機会であり場でもあったのである。

ところが、2章（1）で述べたように、現代の葬儀はそのほとんどが葬儀場で執り行われている。飛騨地域では、2007（平成19）年頃から急速に葬儀場利用が増加している。葬儀場での葬儀は、そのほぼ全てが葬儀場を経営する業者とそのスタッフによって担われる。近隣の人たちは、接待する側から接待される側にその関わり方を変化させた。

このことに伴い、葬儀の準備から片づけに至るまで近隣住民がともに過ごしてきた時間が消えた。その時間内で語り合い知りあってきた機会も失われた。葬儀の運営に必要な不可欠であった技術や知識も伝承の機会を失った。

### （3）住民の受け止め方

この急速な変化を、地元住民はどのように受けとめているのだろうか。高山市が実施している地域福祉懇談会で、江名子地区での第2回懇談会（2010（平成22）年11月25日開催）では、3つあるテーマの一つに「今の葬儀スタイルをどう思いますか」を挙げて議論を行なっている。そこで出された意見の一部を抜粋して紹介する<sup>55</sup>。

- 以前は葬式のために2～3日仕事を休めた。手間暇をかけることができた。
- 本音では楽になった。葬儀場では足はしびれないし、面倒でない。生活も楽になり、やめてしまうのは簡単だが、やめてしまうと戻すのは大変。
- 昔から変わらない地域、寺のある町内で難しいタイミングにきている。寺でやるか葬儀場でやるかは本人の希望であり、年寄りの意思表示であり尊重してきた。班の人をどうしていくかは別問題で、同じメンバーで生活しているので、家族全体の付き合いが強い。
- 葬式に出ないことに旧の人は来なくていいのか？

こんなに迷惑かけてきたのにと物足りない気分もあり、複雑な気分。

- 人数が増え、班が分かれて新しい人は葬儀のスタイルを知らないと思う。
- 江名子に来て20年経つ。当初はつきあいのない人の葬式に3日も仕事を休んでわずらわしさがあったが、3年目に班長をやらせてもらい、学んだことが多かった。自然に教えてもらった。
- 以前の葬式は、3日は仕事を休んで、班長や隣近所が仕切って、取り行なった。それぞれに役割や責任があった。今も山口町では、昔のまま行なっているが、過渡期。今は合理的で楽な葬式でも、近所の繋がりが薄れた。情報が伝わらない。迷惑をかけたくないの思いもある。伝統やしきたりなどなくしてしまうのは簡単だが、一度なくしてしまうと復活できない。大事なことは残していきたい。味や甲斐性や協力など。
- 葬式スタイルを以前のように戻すことはできないので、残したいものが残せるような地域のしくみを考えて提案する。

懇談会で出された意見のほかにも、日常会話のなかであっても、筆者が葬儀のことを質問した場合ほとんどの方が熱心に語りはじめる。その多くが、葬儀のなかで自分が担った役割、年長者の技や仕切り方に目を見張ったこと、近隣の人たちとどのような時間を過ごしたかなどの体験や思い出話である。そして、従来の葬儀がなくなりつつあることを残念に思いながらも、負担が軽くなったことも認め、近隣の人たちとのかかわりが希薄になっていくことに対する不安などが話題に上った。もとに戻すことはできないが、このままでいいとも思っていない住民の存在は明らかである。

### （4）葬儀場での葬儀急増の理由

住民の多くが心にかけてながらも、なぜ葬儀場での葬儀が急速に増加したのだろうか。聞きとり調査の結果から、その理由として考えられることを整理した。

飛騨において急速に葬祭場での葬儀が増えた理由の背景には、第一に高齢化、第二に飛騨地区の特徴があると考えられる。

#### ① 近隣への気遣い

組内の1軒が葬儀場を利用すると雪崩を打ったように次々と葬儀場利用が始まる傾向がある。「自分が手伝っていないのに、近所の衆に頼めない」からだという。

高齢者世帯などでは、若い世代が同居していないため葬儀の手伝いができていない、自宅で葬儀を挙げるとしても当事者である家族が葬儀の方法も知らない、これでは近隣の人に頼むのは申し訳ない、という思いが強い。

本心では従来型の葬儀を望んでいても、近隣への気

兼ねから葬儀場を利用する、この心情も飛騨びとの特性であると言えるだろう。

#### ② 建物環境

葬祭場は椅子式が中心であり靴を脱ぐ必要もないので、足腰の弱った人、車いすや杖を必要とする人も利用しやすい。お寺は本堂前まで階段があることが多く、高齢者にとってはこれも負担となる。また、お寺は、木造、障子であり建物内は寒暖の影響を受ける。ことに冬は寒い。気密性の高い住宅に馴染んだ人にとっては厳しい環境と言えるだろう。

#### ③ 駐車場の確保

葬祭場には一般的に広い駐車場が完備されており建物の間近まで車で移動することが可能である。遠方からの参列者が増えるに従い車で来場する人も増え、個人宅や古い町なみのなかにある寺では駐車場の確保に苦心してきた。

#### ④ 人手の確保

会社勤めの人が増えたことにより、葬儀のために2～3日の休みを取ることが困難となった。地元で創設された会社であれば、以前は「葬儀なら止むなし」と休暇を認める場合も多かったというが、外部資本の会社の増加、また地元の会社であっても外部との取引がある以上、身内以外の葬儀に休暇を取るとは一層難しくなっている。

#### ⑤ 列席者の数

上記と矛盾するようであるが、飛騨では葬儀の列席者が多いことも葬祭場利用を加速させた理由の一つであると考えられる。手伝いはなくなったが「何とはなしに申し訳ないような気がして」今も近隣の人たちが葬儀場に足を運ぶ。大勢の人が集まるために、一定の広さのホールと駐車場のある葬儀場のほうが万事に都合がよい。

つながりが希薄化したとはいえ、村八分の時代から続く「葬式には何としてでもなくてはならない」というつながりを大切にしている心情が、葬儀場での利用を促進しているともいえる。

### 3. 葬儀の変化が近隣の「つながり」に与えた影響

これまでにみてきたとおり、従来の葬儀は、地縁・血縁の人間関係に支えられてきたといえるが、対価を支払うことで必要なものが調達できることになった。“気づまり”からの解放と引き換えに、人間関係が希薄化した。

葬儀の運営のなかでは、組の共有資材（煮炊きに使用する道具、食器、暖房器具ほか）の在り処、保管方法、使用方法などの知識や技術が伝承されてきたが、近隣の共同作業としての葬儀が途絶えるということは、それら途絶えてしまうことでもある。葬儀場では参列者のほとんどが“お客様”となり、定刻どおりに集合・解散とな

るため、ともに過ごす時間が僅かしかない。葬儀の前後は、集まった人たちがお互いの消息を確認しあう場でもあったが、その機会はほとんど失われている。

ここに挙げたような人間関係、資材や知識・技術は、災害時などの非常時に大きな力を発揮することになるが、それらが減少するということは地域社会の持つ非常時への対応力の減退につながる。

自宅、檀那寺などで葬儀を執り行う場合、葬儀に用いる資材や食材、返礼の品を地元で購入することになるが、葬儀場での葬儀の場合は、その葬祭業者と取引のある事業所から購入することになる。全国展開する業者であるほど取引会社も全国規模であることが多いと考えられ、地元での消費活動につながりにくい。

葬儀のスタイルを変えたことにより、新たな悩みも生じている。第9回『葬儀についてのアンケート調査』<sup>56</sup>では、「家族の葬儀を経験して困ったこと」についても質問している（3つまで複数回答）。最も多かった回答が「心付けやお布施の額」47.3%、次いで「葬儀の手順がわからなかった」36.1%、「通夜・告別式の接待の仕方や手配」34.7%、「予想以上に会葬者があった」19.4%、「身内の中での意見の相違があった」16.7%、「頼りになる人がいない」11.9%となっている。

かつて葬儀が共同体の行事であったとき、これらの悩みは生じる余地がなかった。誰が先導するか、誰が何を手にするか、葬列の順序は、といったことは、地域によって異なっており、その地域の習慣の定めに従い行われてきた<sup>57</sup>。人びとは特に教えられるでもなく「葬式の作法」を学習していたものであったし、しきたりを熟知した長老がおり葬儀を取り仕切ったので、その指示に従っていれば悩むことはなかった。

葬儀の過程においては、親戚同士で顔は見知っていても親しく語り合うことは初めて、という出会いもある。手伝いの近隣の人たち同士の間でも、嫁や婿として最近集落に住み始めた人、成人して初めて葬儀の手伝いをする人が、近隣の人たちと長時間をともに過ごすことになる。そういう“場”の積み重ねが、日頃から支え合うことのできる「つながり」を構築してきた。

葬儀の運営は、相互に手伝いあうものであって、手伝う側にとっても大きな負担であったが、やがてはだれもが当事者になる出来事であり、手伝いあうことは当然のことであった。それが現在では、サービスとして購入することができる。手伝う側の負担は減り、葬儀の際にお願いする側にとっての気兼ねも少ない。しかし長期的にみると「自分もお手伝いに行っていないから、頼みづらい」という思いが連鎖し、これまでとは異なる新たな気兼ねが生じている。手伝いあう関係が希薄になると、別のお願いや相談もしづらくなる。「便利だから」「みんなに申し訳ないから」という個々人の選択が、結果として近隣関係の希薄化を招いている。

さらに、近年では「家族に迷惑をかけたくない」それ

ゆえ「自分の葬儀は最小限に、簡素に」と希望する人が増加する傾向にある。このことについて、人が家族の死に直面し、悲嘆を抱え、また、死者を弔うことは「迷惑」なのだろうか、と碑文谷<sup>58</sup>は問う。そして、絆があればこそ、悲しみ、嘆き、弔おうとするのであって、弔いというのは遺されたものの「義務」というよりも「権利」とされるべきというのだ。

確かに、葬儀とは死者本人というより、残された者たちにとって社会的、精神的に意味のある行為といえる。しかしそれを「権利」や「義務」という側面のみで捉えるのでは、日本の共同体における「つながり」を正確には理解することができない。元来、死とは人智を超えた不可抗力の出来事であり、それに伴う驚きや悲しみは、自然発生的、内発的なものである。その出来事を、従来は、近隣の人間関係に支えによって乗り越えてきた。

故人を偲ぶ夜伽の場は、当然悲しいのであるが、涙だけでなく笑顔が見られることも少なくない。亡くなった人の年齢や死亡時の状況にもよるのであるが、故人にまつわる昔話のなかには楽しい思い出、その人となりを表わす面白可笑しい話も語られるからである。夜伽、あるいはお斎の場で、人びとは泣き笑いのような状態になりつつ故人を偲び、故人と自分、あるいはそこに集まった人同士のつながりを感じ合ってきた。

また、通夜の場、そして通夜の晩（夜伽）の場で「〇〇（故人の名）が人間の姿でおる最期の晩やで、も少しいっしょにおるわ」という声や、夜伽やお斎の場で、あるいは手伝いの間の休憩で、「こうしてわしらが過ごす時間を〇〇（故人）がくれたんやナ」という声を幾度となく聞いた。筆者が葬儀の当事者として、あるいは手伝いの場で、参列者として、異なる立場で関わった葬儀の場で耳にした声である。そこに集まった人たちは、故人が死してなお、その人との間に「つながり」を感じていた。

この精神性について、内山は、日本の共同体は自然と人間の共同体としてつくられており、それだけでなく生と死を包んだ共同体としてつくられていると指摘し、日本の共同体を考えようとするとき、日本の共同体の前提基盤を正確にみるべきであるとしている<sup>59</sup>。自然と人間を別のものとしてとらえる共同体論では日本の共同体はとらえることはできない。日本の共同体にはその前提基盤のひとつに自然があり、自然と人間の共同体としてつくられており、それだけではなく、生と死を総合した共同体であるとする。ご先祖様は遠くにはいかない。村の自然と一体になって、村を守っている。

実際に、山間地や農村においては、明治以前の墓は共同体のくらしの身近に建てられている。共同体を見渡す高台や自らの耕した土地の一部に、家族親族の墓として、あるいは共同体の墓地として祀られている。飛騨地域においてもそれは同様である。

そのような共同体において、第一に大切なことはムラ

の継続であり、各家々においては家業を子々孫々に伝えていくことであった。だから、村人同士は徹底的な争いはしない。禍根が残り子孫が影響を受けることを避け、ときには我慢して一步下がっても、子孫に悪影響を与えない方を選ぶ。このように、かつての人びとは、同じ現代に生きる人々相互の「つながり」と、ご先祖様から子孫に続く「つながり」のなかに自己を見出していた。それが共同体の構成員であるということであり、安心の拠り所でもあった。

その拠り所が急速に消失しようとしている。葬儀のあり方の変化に伴い、近隣住民、親類とともに過ごす「場」と「機会」が減少し、お互いに支え支えられる関係が希薄化している。非常時に機動力を発揮してきた組織的活動や技術を伝承する機会も減少している。そして、幾世代にもわたって受け継がれてきた葬儀のかたちが変わることにより、先人たちへの申し訳なさとともに、自らの死と死後のあり方への不安も増大している。

地域社会のなかで幾世代にもわたり培ってきたさまざまな「つながり」が希薄化、あるいは消滅の危機に瀕しているといえる。共同体のなかでの共同作業を以前のかたちに戻すことは不可能であろうし、地域社会の内に起きている課題解決のために本質的なことではない。葬儀をはじめとする共同作業が消失することに伴って失われる多くのことを認識し、「つながり」の維持・再構築のために可能な方策を模索することが重要である。

## おわりに

かつて飛騨地域で執り行われてきた葬儀の場で近隣住民と親類が担っていた役割の整理を試み、葬儀の場において知識と技術の伝承、縁の構築、強化、再構築が行われていたことを確認することができた。そして、その場が失われていることに伴い、急速に近隣関係が希薄化していることも明らかとなった。

共同作業が一旦中断してしまうと、その知識・技術の伝承も中断し、記憶も急速に失われていく。住民の意見にもあるように「以前のように戻すことはできない」だろう。では、これからどのような取り組みが可能なのか、それが最大の課題である。その場で培われていたものを体験的に知っている人が数多くおられる間に次の一手を打たなければ、葬儀の場にかわるつながりの場づくりの機会は永久に失われてしまうかもしれない。

共同体とは、歴史貫通的に生成された結合体である。かつて人々がどのような精神世界に生き、何を大切に受け継いできたのか、このことに対する理解を抜きにしては、風土に根ざした「つながり」の再構築は不可能である。本稿では人々が共同体のなかで大切にしてきた葬儀に焦点をあて、伝統的な葬儀の場で近隣住民と親類が担っていた役割を整理し、この関係や場が失われることの意味についての考察を試みた。この成果を踏まえ、人びと

のつながりづくりの“場”の模索と構築方法の検討について引き続き取り組んでいきたいと考えている。

## 付記

最後になりましたが、本稿執筆に際し、ご助力、ご助言を賜りましたみなさまに心からの感謝を申し上げます。

古くからの友人でもある圓光寺ご住職 圓山正真様、ご多忙の中お話を聞かせてくださいました正宗寺ご住職 原田太石様、慈雲寺ご住職 小林孝明様、常德寺ご住職 高島外成様、本教寺ご住職 平野真様、高山別院でお話をお聞かせくださったご住職のみなさま（調査協力順）、貴重な資料をご提供くださいました高山市役所福祉部様、高山市図書館の利用に関して便宜をお図りくださいました市社協常務理事 田中博幸様、そして構想から終始多くの情報と励ましをくださった高山市社会福祉協議会 中川淳一様、折に触れいろいろなお話を聞かせてくださったみなさま、ありがとうございました。

## 〔参考文献〕

- ・荒垣秀雄・文、細江光洋・写真『飛騨 風土と民俗』（1964）朝日新聞社
- ・岐阜県吉城郡国府町=編『飛騨国府町の民俗 総合民俗調査報告書』（1985）
- ・五来 重『日本人の死生観』（1994）角川書店
- ・萩原町教育委員会 文化資料室=編集『萩原の礼式としたり はぎわら文庫・第16集』（1994）萩原町
- ・芳賀 登=編著『山の民の民俗と文化—飛騨を中心にみた山国の変貌—』（1991）雄山閣出版
- ・飛騨市教育委員会=編集・発行『神岡町史 通史編Ⅱ』（2008）
- ・飛騨市総務部古川町史編纂室=編『古川町歴史探訪』（2010）飛騨市
- ・碑文谷 創『「お葬式」の学び方』（1994）講談社
- ・碑文谷 創『新・お葬式の作法』（2006）平凡社
- ・上枝村史編纂委員会=編集・発行『上枝村史』（2000）高山市
- ・上宝村史観光委員会=編集『上宝村史 下巻』（2005）上宝村
- ・国府町史観光委員会 編集・発行（高山市役所国府支所）『国府町史 民俗編』（2010）
- ・小谷みどり『変わるお葬式、消えるお墓』（2000）岩波書店
- ・高齢者健康福祉研究会=編『葬儀・法要辞典』（2008）土屋書店
- ・牧里毎治『地域福祉論—住民自治と地域ケア・サービスのシステム化—』（2003）放送大学
- ・松之木町誌編纂委員会=編集、松之木町内会=発行『松之木町誌』（2006）
- ・宮村史編集委員会=編集『宮村史 通史編Ⅱ』（2004）宮村

- ・宮本常一『民衆の文化 宮本常一著作集 第13巻』（1973）未来社
  - ・宮本常一『村の崩壊 宮本常一著作集 第12巻』（1972）未来社
  - ・宮本常一『日本民衆史6 生業の歴史』（1993）未来社
  - ・宮本常一『女の民俗史』（2001）岩波書店
  - ・宮本常一『庶民の発見』（1987）講談社
  - ・長倉三朗『日本の民俗 飛騨』第一法規出版（1974）
  - ・日本消費者協会『第9回「葬儀についてのアンケート調査」報告書』（2010）
  - ・日本消費者協会『第5回「葬儀についてのアンケート調査」報告書』（1955）
  - ・二階堂行邦『南無阿弥陀仏の葬儀』（2007）、真宗大谷派宗務所出版部（東本願寺出版部）
  - ・真宗大谷派（東本願寺）ブックレット『報恩講』（2011）
  - ・真宗大谷派（東本願寺）『2010年版 真宗の生活』（2010）
  - ・真宗大谷派高山教区後方委員会=編著『真宗大谷派高山教区学習ノート 2 お内仏に学ぶ』（2008）、真宗大谷派高山教務所
  - ・曹洞宗総合研究センター編集『葬祭—現代的意義と課題—』（2008）
  - ・荘川村史編集委員会=編集『荘川村史』（1975）
  - ・高山別院史編さん室=編集『高山別院史 下巻』真宗大谷派高山別院 照蓮寺 春日智学=発行（1987）
  - ・内山節『共同体の基礎理論 自然と人間の基層から』（2010）農文協
  - ・宇津江区史編纂委員会=編集『宇津江区史』（2004）宇津江区
  - ・山田慎也『現代日本の市と葬儀—葬祭業の展開と死生観の変容』（2007）東京大学出版会
- 1 佐々木宏幹「葬祭の社会的機能について」曹洞宗総合研究センター編集『葬祭—現代的意義と課題—』（2008）、P.149-152
  - 2 NHK制作の番組『無縁社会～“無縁死”3万2千人の衝撃～』は、だれにも看取られることなく死後も遺体や遺品の引き受け手のない人が激増していることを描きだした。2010（平成22）年1月31日 総合テレビで放送された。
  - 3 「社会的な援護を要する人びとに対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書 2000年12月8日、厚生省 社会・援護局 函「現代社会福祉の諸課題」
  - 4 宮本常一「村共同体」『宮本常一著作集 第13巻 民衆の文化』（1973）未来社、P.143 初出は『村の生活とコミュニティスクール』（1950）長吉小中学校 PTA

- 5 宮本常一「村共同体」『宮本常一著作集 第13巻 民衆の文化』(1973) 未来社、P.170
- 6 宮本常一「村共同体」『宮本常一著作集 第13巻 民衆の文化』(1973) 未来社、P.170
- 7 宇津江区史編纂委員会=編集『宇津江区史』(2004)、P.364
- 8 「社会的な援護を要する人びとに対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書2000年12月8日、厚生省 社会・援護局 図「現代社会福祉の諸課題」
- 9 日本消費者協会『第9回「葬儀についてのアンケート調査」報告書』(2010)、P. 8：SQ3 葬儀の場所  
日本消費者協会では、「葬儀のアンケート」を1983(昭和58)年から実施している。第9回の調査概要は次のとおり。調査対象：(財)日本消費者協会全国モニター800名、全国消費者協会連合会会員242名、計1,042名。有効回答者数：1,008名、回収率：96.7%。調査方法：郵送留め置き方式。調査期間：2010(平成22)年3月～6月。
- 10 日本消費者協会『第5回「葬儀についてのアンケート調査」報告書』(1955)、P. 5：SQ3 葬儀の場所、第5回の調査概要 調査対象：(財)日本消費者協会全国モニター300名、全国消費者協会連合会会員795名、計1,095名。有効回答者数：1,095名、回収率：99.5%。調査方法：郵送回収式アンケート。調査期間：1955(平成8)年2月1日～3月31日。
- 11 山田慎也『現代日本の市と葬儀－葬祭業の展開と死生観の変容』(2007)、第4章「代行される葬儀－利用者からの視点」など
- 12 『現代日本の市と葬儀－葬祭業の展開と死生観の変容』(2007)、P.31
- 13 新生活運動：敗戦後、全国の婦人会や青年団が冠婚葬祭の簡素化や封建的因習打、衣食住の合理化に取り組んだ。鳩山一郎内閣はこの動きを国家再建につなげようと1955年、「新生活運動」を提唱。しかし高度経済成長に伴い「消費は美德」となる中、運動は姿を消した。現在でも各地で「香典返しなし」「花輪ポスター(紙花) 掲示」などの取り組みが続けられている。
- 14 小谷みどり『変わるお葬式、消えるお墓』(2000) 岩波書店、P.120
- 15 荘川村史編集委員会=編集『荘川村史』(1975)、P.181
- 16 映画『おくりびと』(2008) 監督：滝田洋二。遺体を棺に納めるために必要な作業(遺体の清拭、整容、化粧など)を行なう専門職である納棺師を主人公とした映画。主人公を演じた本木雅弘の美しい所作、死を悼む日本の文化、死生観などが注目を集めた。英題は『Departures』。第81回アカデミー賞外国語映画賞受賞、第32回日本アカデミー賞最優秀作品賞受賞。
- 17 平成22年人口動態統計「死亡の場所別にみた年度別死亡数百分率」 なお、1994(平成6)年までは、老人ホームでの死亡は自宅またはその他に含んで集計されている。1995年より「老人ホーム」の項目が設けられた。
- 18 平成22年人口動態統計「死亡の場所別にみた年度別死亡数百分率」
- 19 飛騨市総務部古川町史編纂室=編『古川町歴史探訪』(2010)、P.100
- 20 飛騨地域の葬儀の変化、伝統的な葬儀の方法などの概要把握目的に、2010(平成22)年10月から2011(平成23)年3月、同年8月から10月にかけてヒアリング調査を行なった。ヒアリング調査は自由面接法、調査対象者は民生委員等の社会的活動を行なっている寺院関係者、行政職員、社会福祉協議会職員等である。
- 21 平成の合併により、大野郡は白川村1村のみとなったことから、大野郡といっても実質的には白川村のことである。
- 22 岐阜県の面積10,621.17km<sup>2</sup>、高山市の面積2,177.67km<sup>2</sup>(20.50%)、飛騨市の面積792.31km<sup>2</sup>(7.46%)、下呂市の面積851.06km<sup>2</sup>(8.01%)、白川村の面積356.55km<sup>2</sup>(3.36%)で、3市1村の合計面積は4,177.59km<sup>2</sup>、県全域に占める面積は39.3%となる。(2009年10月現在、岐阜県統計局資料)
- 23 岐阜県の人口2,086,590人、高山市の人口93,716人(4.50%)、飛騨市の人口27,349人(1.32%)、下呂市の人口36,623人(1.77%)、白川村の人口1,861人(0.09%)で、3市1村の合計人口は159,549人、県全体に占める人口は7.67%となる。(2009年10月現在、岐阜県統計局資料)
- 24 飛騨市教育委員会=編集・発行『神岡町史 通史編II』(2008)、P.799
- 25 『古川町歴史探訪』P.9
- 26 例えば、上宝村など
- 27 例えば、国府町宇津江、神岡町など
- 28 『宇津江区史』P.364
- 29 宮村史編集委員会=編集『宮村史 通史編二』(2004)、P.738-739
- 30 松之木町誌編纂委員会=編集、松之木町内会=発行『松之木町誌』(2006)、P.561
- 31 『神岡町史 通史編II』P.800
- 32 上宝村史観光委員会=編集『上宝村史 下巻』(2005)、P.264
- 33 『宮村史 通史編二』P.737
- 34 『神岡町史 通史編II』P.801
- 35 『宇津江区史』P.365
- 36 『宮村史 通史編二』P.739
- 37 『荘川村史』P.183
- 38 『古川町歴史探訪』P.99
- 39 『宇津江区史』P.365
- 40 『古川町歴史探訪』P.99
- 41 『宇津江区史』P.366

- 42 『神岡町史 通史編Ⅱ』 P.804
- 43 長倉三朗 『日本の民俗 飛騨』 第一法規出版  
(1974) P.221
- 44 『神岡町史 通史編Ⅱ』 P.804
- 45 『古川町歴史探訪』 P.99
- 46 『宇津江区史』 P.366
- 47 『古川町歴史探訪』 P.99
- 48 『宇津江区史』 P.366
- 49 『日本の民俗 飛騨』 P.220
- 50 『宇津江区史』 P.367
- 51 『古川町歴史探訪』 P.100
- 52 『上宝村史 下巻』 P.462-463
- 53 本文で紹介したものほかに、移入した家が葬式  
を3回出すことで地域社会に溶け込めること  
等の意味もある。
- 54 この成果は、大井智香子「災害救援ボランティア  
センターの設置・運営に関する一考察～岐阜県にお  
ける2004年23号台風被災地の実態調査から～」  
(2006)などで報告した。中部学院大学・中部学院  
大学短期大学部 研究紀要 第7号、 P.1-17
- 55 高山市役所 福祉部地域福祉課の資料より
- 56 日本消費者協会「第9回『葬儀についてのアンケー  
ト調査』報告書」(2010)、P. 32-34：SQ12家族の葬  
儀を経験して一番困ったこと
- 57 碑文谷 創『新・お葬式の作法』(2006) 平凡社、  
P.30-31
- 58 『新・お葬式の作法』(2006) 平凡社、P.21
- 59 内山節『共同体の基礎理論 自然と人間の基層から』  
(2010) 農文協、第2章「日本の伝統的な共同体を  
読み解く」P.53、第3章「共同体のかたち」P.90-93、  
98、第4章「日本の自然信仰と共同体」P.111